

13:15 - 13:25	主催者挨拶
13:25 - 14:55	基調講演 「スポーツのまち」「音楽のまち」川崎に楽しい風景をつくろう - 建築で、ストリートで、エリアでできること - 講師 生活環境プロデューサー／建築ジャーナリスト 中崎 隆司 先生
14:55 - 15:05	休憩
15:05 - 16:05	◆「公共スペース景観形成ガイドライン」の改訂について【川崎市】 ◆公共スペースにおける景観配慮型製品の紹介【川崎市都市景観協議会会員企業】
16:05 - 16:20	講評
16:20 - 16:30	閉会挨拶

*プログラムは変更する場合があります

講師紹介

中崎 隆司（なかさき・たかし）



- 一出身 1952年（昭和27年）福岡県生まれ
- 一学歴 法政大学社会学部社会学科卒業
- 一職歴 生活環境（パッケージ・デザインから建築、まちづくり、都市計画まで）に関するプロジェクトのアドバイス、および調査、企画、計画、設計などを総合的にプロデュースすること、建築・都市をテーマとした取材・執筆することを職業としている。
- 一著書 ■『建築の幸せ』（2006年2月発行 ラトルズ）
■『ゆるやかにつながる社会ー建築家31人にみる新しい空間の様相ー』（2006年11月発行 建設通信新聞社）
■『なぜ無責任な建築と都市をつくる社会が続くのか』（2007年6月発行 彰国社）
■『幸せに向かうデザイン』（共編著）（2012年5月発行 日経BP）
- 一活動 ■相模湖周辺景観形成ガイドプラン策定調査（1999年度）
■相模湖周辺景観誘導指針策定調査（2000年度）
■相模湖周辺景観形成ガイドプラン実施計画（2001年度）
■東京・築地場外市場商店街活性化コーディネーター（2000～2004年）他多数
- 一公職 ■総務省「新しいコミュニティのあり方に関する研究会」構成員（2008年度）
■財団法人日本住宅・木材技術センター「間伐材住宅設計専門委員会」委員（2005,2006年度）
■徳島県観光拠点施設整備支援事業プレーストリーミング委員会委員（1997年度）
■茨城県県庁舎跡地利用懇談会委員（1997年度）他多数

川崎都市景観・プラットフォーム - 第19回 -

主催●川崎市／川崎市都市景観協議会

後援●川崎商工会議所（社）神奈川県建築士事務所協会川崎支部
（社）川崎建設業協会（社）かながわデザイン機構

●川崎市都市景観協議会とは

川崎市都市景観協議会は平成6年7月に景観事業に携わっている市内7社の企業により発足されました。最大時には14社の会員規模となりましたが、現在は当会の設立趣旨に賛同して戴いた9社の企業で活動しております。景観事業に関する事柄での川崎市行政との協働作業や協議会独自の活動を通じて、川崎市の都市景観事業に貢献致したく現在の活動を行っています。

参加費無料

10月19日（金）

川崎市役所第4庁舎2階ホール

開演 **13:15** ～ （開場 12:45）



基調講演

「スポーツのまち」「音楽のまち」川崎に楽しい風景をつくろう

ー建築で、ストリートで、エリアでできることー

若手建築家による、現在進行中のプロジェクトの模型を展示する展覧会「新しい建築の楽しさ」で紹介した12のプロジェクトを通して「建築にできる風景づくり」、東京・青山地区で開催する「トメル・ミセル@アオヤマ」プロジェクトを通して「ストリートでできる風景づくり」、西新宿で進めている超高層ビル街を背景に行われるクリテリウム（市街地などに設定された短い距離（1 km～5 km）の周回コースで競い合うスリリングな自転車ロードレース）から始まる「東京クリテリウム」プロジェクトを通して「エリアでできる風景づくり」、多摩川を中心に川崎と上流部、対岸をつなぐ「TAMARIBA」プロジェクトなどについてそれぞれ紹介するとともに、川崎の「スポーツのまち」「音楽のまち」づくりに加えたい風景を提案します。

下記では例として展覧会「新しい建築の楽しさ」と「東京クリテリウム・プロジェクト」についてご紹介いたします。
（中崎 隆司）

◆「新しい建築の楽しさ」展

若手建築家からのメールは深夜が多い。時間を忘れて設計に没頭しているのだろう。彼らにとって建築を考えている時がいちばん楽しいのだろうと思う。建築ジャーナリストの仕事にはそのような気持ちを持った若い才能と出会う楽しさがある。

建築は計画、基本設計、実施設計という設計のプロセスを経て工事に入る。建築家は設計のプロセスのなかで大量の模型をつくる。建築をつくっていく上でクライアントやスタッフとの間のコミュニケーションが大事だと思っているからだ。模型があればディスカッションが弾むし、いろいろなことを試せる。そのような模型を模型展という形で多くの人に見ていただきたいと思った。

私は20年以上若手建築家を注目してきている。当初の若手建築家は私と同じように50代になっている。振り返って建築の変化の速度は増していると感じている。

少子高齢化、人口減少、産業構造の変化、地域経済の疲弊、防災対策など、日本の社会は多くの課題を抱えている。若手建築家もそれを肌で感じ、建築計画にはまちづくりの視点が改めて必要であると考え始めている。また既存のものの中から新たな価値を読み取っていかうとしている。そして建築というカテゴリーにこだわらずにジャンルの境界線を超えることによって生まれる新しい豊かさや新しい価値観を求め、そこから新しい建築を生みだそうとしている。

また若手建築家にとって海外で仕事をすることは自然なことになっている。日本では建築や建築家に対する期待が薄れている。建築が求められている国や地域があればそこで建築をつくりたいという意識が生まれている。彼らは日本の建築の独自性を意識しながら海外のプロジェクトに取り組み、新しい建築を生みだそうとしている。



◆「東京クリテリウム・プロジェクト」

西新宿超高層ビル街は1960年に計画された20世紀型の都市再開発である。その特徴は超高層ビルと公開空地で構成されたグリッド状の街区と、それらをつなぐ歩車分離された街路である。街路は2層構造や立体交差など立体的な構造を持ち、街区によって異なる公開空地の形状は歩行者空間とのつながりの形も様々にしている。それらが歩行空間の回遊性を損ね、地域全体の統一感や一体感をつくれないうる。

西新宿超高層ビル街は21世紀になるとともに地域ブランド力や情報発信力は弱まり、オフィス街としての価値、商業都市としての価値ともに低下している。21世紀型の都市として再生させるためには時代性を反映された新しいテーマが必要である。

私たちはスポーツ、観光、環境をテーマにした西新宿超高層ビル街21世紀化計画という都市再生の課題設定を行い、デザインの力で解いていくことを始めたいと考えている。

その第一弾として「東京クリテリウム・プロジェクト」の実現に向けて行動を開始する。

クリテリウムは都市をフィールドに行われる自転車ロードレースであり、市街地などに設定された短い距離（1 km～5 km）の周回コースで競い合うスリリングなレースである。展開は分かりやすく、観客は短い間隔で目の前を選手が猛スピードで複数回通過するシーンを観ることができる。

超高層ビル街を背景に行われるクリテリウムは世界的にも例はなく、西新宿超高層ビル街の街路の立体交差などを利用したコースは都市のなかを走り抜けるダイナミックさを十分に感じることができる。

さらにこのイベントを通じて自転車利用者のマナーやルールを示し、自転車利用者の意識向上をはかっていきたいと考えている。

自転車は環境にやさしい乗り物であり、都市で行うことができるスポーツである。そしてレースなどのイベントは世界から観光客を誘致することができる。

日本ではここ数年、自転車を通勤手段として使用している人も増えてきているが、自転車レーンの整備は遅れ、自転車を駐輪するスペースも少ない。西新宿超高層ビル街も同様の状況にあり、このイベントを機会に自転車での来場者のための公開空地を利用した駐輪場など既存空間のなかに関連施設を埋め込んでいきたいと考えている。

「東京クリテリウム・プロジェクト」は西新宿超高層ビル街の再生につなげていくものであり、21世紀にふさわしい都市空間という付加価値をつけてブランドを上げていくための活動である。

